

2015年11月8日の説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書 11章 27～28節

説教「真に幸いな者」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

多くの人々が集まり議論が行われていたところに、突然一人の女の人が出て来て、主イエスに向かって声高に「なんと幸いなことでしょう。あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は」と言いました。あなたのような力ある方、霊に満たされたすばらしい方、そんなあなたを産み育てたお母様はなんと幸せな方でしょう、と言うのです。主イエスを悪霊の頭だと言わんばかりの人々の批判、中傷に対して、この女性が語り始めたのは称賛の言葉です。両極端な人間の言葉がここで交錯しています。非難と称賛、それは私たちがこの世で生きていくとき、どんな業にもついてまわります。私たちは称賛されるのももちろんうれしくなりますが、その言葉におぼれ、ついいい気になってしまいます。そのとき危険なのは、神からの誉れを忘れてしまうことです。一方、人間の行為に批判や非難はつきものです。どんなよいことをしても、必ず悪く言う人が出て来ます。しかし、私たちはそのようなことで一喜一憂してはなりません。人間の声に振り回されるのではなく、いよいよ神の御声に耳を傾け、神に喜ばれ、神の栄光を現すためにはどうしたらよいかを考えていきたいものです。私たちを本当に正しくお審きになる方、そして私たちを引き上げ、ほめてくださるお方は神だからです。

さて、「なんと幸いなことでしょう。あなたを宿した胎、あなたを吸った乳房は」と言い始めた女の人に対して、主イエスはすぐに「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」と言われました。その女性は、主イエスの母である人こそ、およそ母親の中でも最も恵まれた幸いな人だと思いました。そう叫ばずにおれなかったのでしょう。女性特有の感覚を素直に口にしたのかもしれませんが。ただ、いつの世も、英雄や偉人が出ると、必ずその人を育てた母親はどんな人なのかということに世間は興味・関心を持つものです。どんな家庭で育ったのか、どんな子ども時代だったのか、その兄弟・姉妹はどんな人なのか、といったことに注目が集まります。

実は、宣教活動に忙しくしておられる主イエスの日々の一コマで、その家族に周りの人々の注目が集まったことがありました。主イエスのところに母と兄弟たちがやってきたのを見つけたある人が主イエスに知らせます、「母上とご兄弟たちが、お会いしたいと外に立っておられます」。すると、主イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行っ人たちのことである」と答えられたというのです(ルカ 8:19～21)。

そこで主イエスが言おうとされたことは、ここの御言葉と重なってきます。主イエス・キリストの母だから、主イエスと血のつながりがあるから、主イエスを小さい時からよく知っていて親しいから、だからその人は立派だとか、神さまにより近いとかいうことではないのです。また、その人が主イエスと人間的に近い関係にあるからと言って、

うらやましく思うこともいらないのです。

主イエスが「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」と語られたこのエピソードはルカによる福音書だけが記録している記事です。しかし、この言葉はすぐ前の話と無関係ではありません。汚れた霊がいったん私たちの中から追い出されても、元の住まいがきれいに整えられたらもっと悪い7つの霊を引き連れて戻ってきて住みつくようになるという不気味な警告です(24～26節)。汚れた霊がもっと強力な部隊となって舞い戻ってくるという話は、汚れた霊に支配されやすい私たちの現実をよく物語っています。私たちが心をきれいに掃除して整えたとしても、そこが空家のままであればかえって危険なのです。汚れた霊にとって、最も居心地のよい住まいは私たち人間の心です。悪霊は私たちの中に住みたいと思っており、戻りたいと思っています。これはリアルな現実です。私たちは心の中を知恵や教養や経験で満たそうと努めているかもしれませんが、7つの悪霊と一緒に攻撃を仕掛けてくるとき、だれがそれを撃退することができるのでしょうか。

そうならないために、どうすればよいのでしょうか。それは7つの悪霊よりももっと強力な方イエス・キリストに住んでいただくこと、主イエスにこの家の主人となって頂くこと以外にありません。わが心の内に主イエス・キリストをお迎えすること、私を聖霊の宮としていただくことよりほかにありません。だからこそ本当に幸いなのは、神の言葉を聞き、それを守る人なのです。「守る」というのは、見張るとか保管するといった言葉です。つまり、神の言葉を聞いて、その言葉をしっかりと心の内にたくわえ、それに聴き従っていくことです。主イエスとその御言葉が宿るとき、私たちは悪霊の支配から解放され、聖霊の宮としての幸いな歩みが与えられます。

ところで、「なんと幸いなことでしょう」という言葉を、マリアはかつてある人から直接語りかけられたことがありました。彼女がまだ誰にも注目されておらず、それどころか深い恐れと不安に襲われていた時のことです。受胎告知を受けたマリアが、神からの言葉に身を委ねて親族のエリサベトのところを訪ねたとき、エリサベトはマリアに言いました、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう」(ルカ 1:45)。彼女は一人の人間として神から大いなる幸いをいただきました。それは血肉の関係によって与えられたのでありません。神の言葉を聞きそれを守ることによって得た真の幸いでした。

私たちも、神の御言葉を心にたくわえ、主イエスが聖霊において私たちの内に住んでくださり、私たちを守ってくださるといふその幸いの中に身を置いていきたいものです。